

ども、「この人間そのものが故郷（ふるさと）という形に思ってもらえて、集まってもらったらね、そこに居場所がなかった人でもね、ここにいればなんとなく居心地がいいじゃないかというふうになってもらえればいいかなあとと思いますね。これもまあひとつのつながりだから、相談したり、『あ、そだ、あそこに行ったら人がいる』っていうなかで、人が育って行って、大人になって、『あそこで、大きくなったんだ』というふうにしていくような形になれば、いいんじゃないかなと」といった「語り」を取り上げていました。

こういった緩い〈つながり〉は、公的なセーフティーネットではカバーできない領域だと思います。

こうした〈つながり〉というのを説明するときに、〈つながり〉という言葉だけでは、まだちょっと説明が足りないかなと思って、今回、「依存先」という言葉を持ってきました。この「依存先」というのを使っているのは熊谷晋一郎先生で、「TOKYO 人権」のインタビューで答えているんですけども「自立をめざすなら、むしろ依存先をふやさないとイケない」というふうに熊谷先生は言っています。もちろん、熊谷先生は、障害者の自立生活から依存先というのを語っていらっしゃるんですけども、ある意味では、依存先が限られてしまっている被災者や避難者とか、そのほか移民の方であったり、マイノリティの方であったり、そういった方々にも同様のことが言えるのではないかなと思っています。

ここで重要なのは、依存先の複数化、あとは多様化であって、一方的なことではなくて、相互依存的な関係の構築というところに目を向ける必要があるということで、「依存先」という言葉を最後に紹介しました。

この「依存先」という言葉も非常に重いことのように受け取られてしまいますし、そういう印象を与えるんですけども、第12章の木村先生の章の「語り」のような緩い〈つながり〉であっていいので、そういった「依存先」の複数化や多様化が、〈つながり〉において重要になるのかなと思っています。

『〈つながり〉の戦後史』で中心的な概念として〈つながり〉というのを導入されていましたが、この本が何を広く問いたかったのかというのを私なりに考えたら、やっぱり家族を起点に、どのように他者とつながって、コミュニティとつながって、なおかつ、そのコミュニティの中で承認されるのかというところを、長期的に捉えて問うているのではないかというふうに思ったので、その辺おふたりの著者からお話が聞ければいいかなと思っています。

すみません、長くなりましたけれども私の報告は終わりにします。ありがとうございました。

西城戸：ありがとうございました。では、続いて、よろしく願いいたします。

## ■『鳥栖のつむぎ』を読む：笠原良太（早稲田大学）

笠原：早稲田大学総合人文科学研究センター招聘研究員の笠原良太と申します。本日は、貴重な報告の機会をいただきありがとうございます。私は、国内の石炭産業の転換と炭鉱離職者の子どもの進路や人生移行について、ライフコース論をもとに研究しています。とくに、地域崩壊を伴った閉山、高度成長後期の北海道における炭鉱閉山を中心に研究しています。

『〈つながり〉の戦後史』の序章にもあったように、炭鉱閉山と子どもや家族の研究をしていると、やはり2011年の原発事故によって避難を強いられている人たちのことを考えずにはられません。時代や地域は違いますが、歴史的出来事によって移動を強いられた点では、原発事故と炭鉱の閉山は共通しています。今回、ライフコース論の視点から、『鳥栖のつむぎ』を読むと何がわかるのかについて報告して、原発事故とライフコース、さらには社会変動とライフコース研究の可能性について考えていきたいと思います。

ライフコース論は、そもそもライフサイクル論から展開して登場したもので、夫婦や家族単位ではなく、家族成員個々人の生涯にわたる発達過程に注目して、個人のライフコースの束として家族過程を捉えるアプローチです。それによって、多様な道筋をたどる家族のダイナミックな過程を観察するという利点があります。「社会変動とライフコース」研究という壮大なテーマは、マクロな社会変動とミクロなライフコースの相互作用、相互連関を動的に捉える社会学研究であって、具体的には、ある歴史的出来事を取り上げて、それが人びとや家族、地域のライフコースにおよぼした衝撃を横断的、縦断的に記述して、多元的に説明するという方法を

とります。

これまで、多くの歴史的出来事を扱った研究があります。グレン・H・エルダーの『大恐慌の子どもたち』、タマラ・K・ハレーブンの『家族時間と産業時間』など、研究の蓄積があります。先ほどの『〈つながり〉の戦後史』は、炭鉱の閉山という歴史的出来事を扱っています。早稲田大学の常磐炭硯研究、『炭硯労働者の閉山離職とキャリアの再形成』に関する研究も、炭鉱閉山という歴史的出来事を取り上げて、多元的な時間枠組み（歴史時間、産業時間、地域時間、企業時間、家族時間、個人時間）の中に、その出来事を位置づけ、離職者とその家族がいかに関係を再組織化していくかということを示しています。

福島第一原子力発電所の事故も、まさに歴史的出来事であり、ライフコース研究でしっかり取り組まなければいけません。原発事故は、つぎの3点において、非常に特異な歴史的出来事であるといえます。第一に、事故による被害が非常に広範にわたっている点、第二に、それが継続している点、第三に、被害の深刻さと全面的にわたっている点です。この事故は広域にわたって膨大な避難者を生み出し、健康面や精神面、生活面に深刻な影響を長期にもたらしている出来事です。このような出来事に遭遇した人たちのライフコースを捉えることは、家族への衝撃や出来事への対処を捉えるうえで重要です。適時的調査ではなく、逐次的調査が求められています。

『鳥栖のつむぎ』は、原発事故の当時のようすや、避難までの過程、避難後の生活などを把握できる非常に貴重な記録です。とくに、母親みずから執筆した物語をもとに構成されているため、避難や帰還をめぐる彼女たちの葛藤や迷い、その経験の意味づけをライフヒストリーとして、質的に把握できる点で非常に重要です。原発事故の「自主避難」が、主要には母子避難であることから、以下では母親に注目して、彼女たちが原発事故をどのように経験し、鳥栖に避難したのか、その選択の要因について、ライフコースの視点から整理したいと思います。

ライフコースには、4つの構成要素があります。先ほど指摘した多元的な時間の中での「時空間上の位置」や、いつ出来事を経験するかという「タイミング」、家族や重要な他者の人生上の位置から影響を受ける「結び合わされる人生」、そして「ヒューマンエージェンシー」（人間行為力）の4点です。

まず、タイミングについて。『鳥栖のつむぎ』では、事故後の母親が多くの困難を抱えていて、いろいろな制約の中で、子どもを守るために避難していく6つの物語がありました。彼女たちが困難に直面した要因は、個人的資質の不足ではなく、2011年に20代から40代にあり、出産・育児期にあったというタイミングによるものです。ライフコース論の中でよく用いられるAge、Period、CohortのA-P-C空間図（図1）でみると、彼女たちは1970年代、80年代に生まれ、10歳代、20歳代を90年代、2000年代に過ごしたコーホートに属します。ちょうど2011年に子どもを持つ、育てるタイミングであり、彼女たちの子どもは幼稚園生や小学生でした。彼女たちは、農家の1人を除いて専業で育児を担っていたときに事故に遭遇しました。それゆえに彼女たちが放射線による子どもの健康被害を心配する役割を期待され、遂行し、鳥栖への避難を具体化していきました。自主避難について、世代間で認識の違いがみられたのは、歴史的出来事に遭遇したタイミングによる違いです。彼女たちの親世代は、孫のことを考えてはいるものの、原発から距離のある地域を中心に自主避難に消極的でした。

つぎに、原発事故がいつ、どこで起きたのかという「時空間上の位置」も、住民の避難や帰還をはじめ、その後のライフコースを決定づけます。事故が起きたのが、2011年の福島県浜通り、相双地区であり、原子力産業のみに依存していた地域で発生したため、長期的な地域産業の衰退・崩壊を意味しました。先ほど、高齢者は戻る意思のある人もいるということでしたが、若年層は、放射線量の高さだけでなく、地域産業や経済など将来に対する不安から、帰還が進まないということが予想されます。そして、尺別炭硯が閉山した高度成長期のように、他産業・成長産業による吸収力もないため、住民は避難の継続か帰還かで揺れ動くこととなります。

また、事故をどこで経験したのかということも重要です。同じ出産・育児期の母親であっても、地域によって影響と対応が異なります。浪江町出身の母親、Kinariさんの例からわかるように、原発立地自治体とその周辺では、緊急避難を余儀なくされますが、頼れる親族もみな被災している。彼女は、震災当日の夜中に義理の

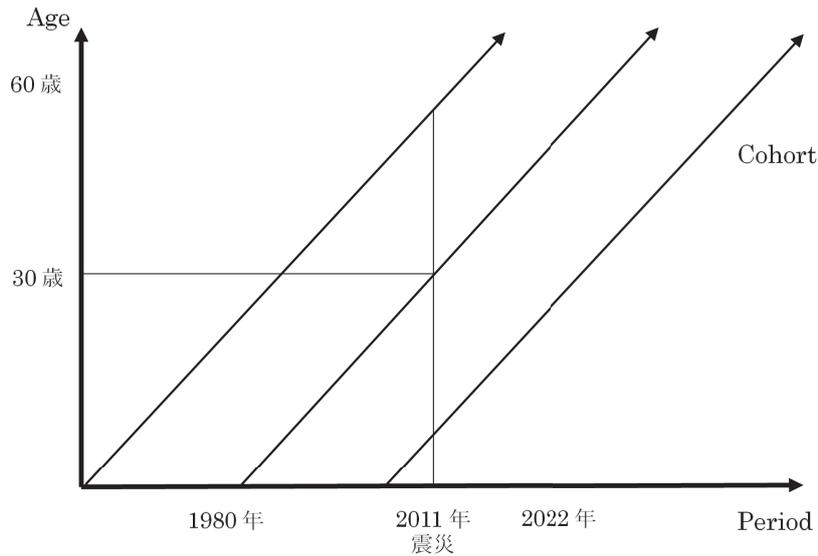


図1 A-P-C空間図（福島第一原子力発電所事故避難者）

妹一家が避難して来て、翌日に緊急避難で同じ浜通りのいわき市内に行く。小学校に避難したあとに夫の祖母の家にみんなで避難して、大人数で暮らす。その後、郡山市の体育館に移動して、6月半ばによりやく県外避難を決定するという経緯でした。頼るべき親族も被災していることが、原発付近の家族の特徴でした。

一方、原発から離れた地域では緊急避難はないですが、ホットスポットをはじめ、放射線の被害は母親たちを不安にさせます。原発から遠いほど、自主避難に対しての理解が得にくく、母親たちが苦悩しているようすがわかります。たとえば、市川市の母親の例や北関東の母親の例があげられます。単なる物理的距離だけでなく、地域社会の特徴、地理的・歴史的な背景による違いもみられます。市川市の例でいえば、放射能を心配する人があまりいなかったり、「放射能を気にする人は考えすぎである」という雰囲気もあった。「北関東の保守的な地域」では、避難をめぐる世代間、近隣住民間の対立が浮き彫りになったそうです。

また、福島県の浜通りでは、血縁、地縁、学縁による結びつきが強く、浜通りで生まれ育った母親たちは、地元、故郷を離れることへの抵抗感を強く持っていて、遠方への避難を難しくしていたようすがうかがえます。このように、彼女たちが生まれ育った地域、とりわけ浜通りの歴史的・文化的背景が、彼女たちの避難の選択を規定したということがわかります。

3つ目に、母親たちが鳥栖に避難するという選択、意思決定は、重要な他者の人生上の位置から影響を受けます。もちろん、子どもがまだ幼いということで、避難を検討しなければならないという点もそうですが、自主避難に消極的な親や家計支持者である夫の理解を得るなど、調整が必要になりました。郡山の例でみられたように、親孝行のために実家近くに居住していた場合、「避難＝祖父母と孫を離ればなれにってしまう＝親不孝」と捉えることになり、そういう点でも避難が難しくなっていました。母親たちは、子どもを守ると同時に、自ら子どもとして親孝行するという二重の役割を担わなければならない、葛藤を抱いていました。

また、家計支持者である夫も「自らの仕事のことで頭がいっぱいだった」というように、転勤や転職、別居というのは非常に難しく、遠方の鳥栖への避難というのは難しかったことがわかります。原発事故による自主避難は、基本的に母子避難であり、二重生活の形態をとるため、精神的・経済的に容易に決断できる選択ではありませんでした。母親は夫に避難の必要性を説得し、理解してもらおうというケースもみられました。

そして、避難後も母親たちは親や夫の生活を気にかけてつ、ほとんど1人で子どもの生活を管理することになりました。彼女たちは、子ども、夫、親など重要な他者の状況や人生上の位置に左右されながら、鳥栖への避難を決定し、生活していったのです。

このように、さまざまな外的制約がある中で、母親たち個人のそれまでの経験や能力、努力が、最終的に避難を可能にしていきます。4つ目の要素である人間行為力です。彼女たちは、なによりも「子どもを守る」と

いう目的のために、早くから積極的に放射線による健康被害や避難者受入れに関する情報を収集し、原発からなるべく遠く、なおかつ手厚い支援のある地域を探します。そこが鳥栖だったわけです。また、避難先での生活においても、彼女たちは人間行為力を発揮して、二重生活という厳しい状況の中でも、新たに関係を築いていきます。それを仲介したのが、支援団体であるピンクバードです。ピンクバードの活動に積極的に参加し、新たな才能を発揮したり、「避難」という共通点を有する母親同士でつながることで適応していきます。

その起点となったキーパーソンが存在も重要です。彼女の存在によって、母親たちが鳥栖になじむことができ、第二の故郷を構築できたといえます。母親たちは、同じ境遇とはいえ、いろいろな地域から集まっているため、つながることは難しかったはずですが、しかし、ピンクバードの活動を機に、子どもを守るだけでなく、「避難者」というレッテルを自ら取り払い、避難先での生活を切り開いていく力強さがみられました。

このように、震災から2年近くの間、母親たちがライフコース上の重要な選択を数多くおこなっていたことがわかります。そして、その経験が蓄積され、状況に応じて家族関係や居住地、生活スタイルなどを変更していることがわかります。彼女たち母親が中心となって、家族が原発事故という歴史的出来事に翻弄されながらも、柔軟に対応していたことがわかります。

ただし、彼女たちがさらに翻弄されるのは、こののち、避難者支援の打ち切りや政策の変更、避難元地域の除染状況、復興状況の変化に直面したときです。この点が原発事故の特徴です。さらに、家族の中では、子どもが成長して進級・進学するタイミングで避難元に戻るという選択もありえます。震災から11年の間に、母親たちがどのような選択をしたのかが非常に気になります。追加の調査や実態把握というのは重要な課題であろうと思います。

そのほか、母親に限らず、父親と子どもがどうだったのかを記述することも重要な課題です。とくに、父親が二重生活でどうなっていたのか、どのような経済的・精神的負担があったのか、職業キャリアの継続・中断という選択はいかになされていたのかという点も踏まえる必要があります。

また、子どもについて、『鳥栖のつむぎ』では小学生低学年以下のいわば精神的に親に依存した段階の子どもが描かれていました。なかには、父親との別れのたびに泣いてしまう子どももいましたが、一方で、避難先ですぐに友だちをつくるような柔軟性もみられました。歴史的出来事に遭遇した子どもを捉える際、『〈つながり〉の戦後史』でみているように、家庭・学校の双方をみることが重要です。また、小学生と中学生、高校生では直面する課題が全く異なります。震災当時の中学生、高校生に対する調査は難しいと思いますが、進路選択をはじめ、ライフコースへの影響を捉える追跡調査が望まれます。

最後に、『〈つながり〉の戦後史』に立ち返って考えたことを指摘して終わります。まず、炭鉱閉山後の母親の対応について。これまでみてきたように、原発事故後の避難では、母親が子どもを第一に考えて対応していましたが、炭鉱閉山の場合も母親が重要な役割を果たしていました。夫の再就職を支えつつ、子どもの転校や進路変更に対する不安を緩和したり、転出先で働きに出たり、PTA活動に参加したりと、家族の定着のために尽力していました。『〈つながり〉の戦後史』のコラム4番、7番が参考になります。炭鉱離職者である父親や子どもだけでなく、母親に注目しなければいけないことを改めて気づかされました。

第二に、出来事の突発性と家族の対応について。尺別炭砒の閉山は、子どもにとっては突然の出来事でしたが、原発事故ほど突発的ではなく、産業の衰退からある程度予測できた出来事でした。学卒を迎えた子どもを他産業・地域に他出させるなど、閉山前の対応を含めて、家族が産業転換にいかに対応したのかを捉えなければならぬと再認識しました。

第三に、高度成長期の特性について。尺別炭砒の閉山は、地域崩壊をもたらすという点では原発事故と共通していますが、時代状況、高度成長期の成長産業都市にほとんどの家族が移動して、吸収されたというストーリーが『〈つながり〉の戦後史』で描かれています。とくに、子どもは豊富な進学機会を活用して大学等に進学し、成長産業に就職するといった進路を達成できた点で、ある意味プラスの側面もありました。他方、2011年の原発事故は、家族、子どもにどのような影響があったのか、経済状況や高学歴化の進展具合の違いで、進学や就職が変わるだろうと思います。

最後に、社会変動とライフコース研究における逐次的調査の可能性について。『〈つながり〉の戦後史』では、

回顧的調査が中心であり、それを補うために当時の中学生の作文など一次資料を扱っていますが、『鳥栖のつむぎ』は逐次的調査が可能であり、とても魅力的です。実際、逐次的調査は、どの程度可能なのでしょうか。震災から11年が経って、当時の子どもがどのように振り返っているのか。とくに、『鳥栖のつむぎ』で母親が書いた物語を子どもは読んでいるのでしょうか。読んだうえで、どういう感想を持っているのかについても知りたいです。長くなりましたが、私からは以上です。

## ■コメント・ディスカッション

西城戸：では、次に、早稲田大学の嶋崎さんにコメントをしていただこうと思います。よろしくお願いいたします。

嶋崎：早稲田大学の嶋崎です。よろしくお願いいたします。きょうは、大変刺激的な時間をいただきました。ありがとうございます。私からは4点コメントします。これまでの話と少しずれている点があると思いますけれども。

今回、『〈つながり〉の戦後史』と『鳥栖のつむぎ』の2冊を取り上げました。まず大きな枠組みとして、『〈つながり〉』は、炭鉱閉山という職場とコミュニティの崩壊によって、人々が離散していく、散っていく過程で〈つながり〉がいかに機能したかを捉えている。それに対して『つむぎ』は、あちこちから自主的に避難してきた人たちが、受け入れ先に集住して、新たに関係を紡ぐ過程です。この2つの動きは非常に対照性がある、この点でも興味深いと思いました。

『つむぎ』の場合の受け入れ側の特性について少し考えたのですが、先ほどの笠原さんの話にもあったように、キーパーソンが存在が非常に重要であるということは、この本の中でも書かれています。それとは別に、本の中では特に焦点の当たっていないところで、集住した、雇用促進事業団住宅に集まって住んだということ、この点は実はすごく意味があるんじゃないかと思っています。これが1点目です。

鳥栖の場合には、「つばさ鳥栖」という280戸の雇用促進事業団住宅に集住しました。この雇用促進事業団住宅というのは、1959年からの炭鉱離職者の雇用対策用に発足した、雇用促進事業団が各地に膨大に建設したものです。この『〈つながり〉』にも出ている船橋なども同じ280戸ぐらいです。つまり、10棟ぐらいからなる集合住宅です。『つむぎ』でもこの団地の中で、つまり生の場、物理的な場が成立して、それゆえにでき上がってくる〈つながり〉、緩やかな〈つながり〉という部分は非常におもしろいと思いました。

『〈つながり〉』の場合には、例えば広島事例も雇用促進事業団住宅に皆で移っていくわけですが、当時の雇用促進事業団住宅は、あちこちの閉山した炭鉱から集まってきて、いわばその中が縦割りなんですよ。なので、60年代、70年代の雇用促進事業団住宅の場合は、炭鉱ごとにとまってきたまま、分離したままの形だったのではいか。現在、当時移ってきた人たちが高齢者になって、最後、この住宅をどうするかが問題になっているわけですが、多分、分離したままだろうというのが私の推測です。

今、私自身の関心が、移住先での定着ということに広がっていて、雇用促進住宅での集住とそこでの〈つながり〉を考える上でも、この『つむぎ』での、受け入れ側の視点というのは非常に参考になりました。

2点目は、『〈つながり〉』の話は、廣本さんも指摘しているように、当時の関係者に向けた整理という部分で、かなり成功談のようになっている、この点は留意していただきたいです。とはいえ、実際、大変成功したんだと思います。これは、やはり1970年という、高度経済成長期という時代効果があったことも、ここに参加していただいている方に理解していただきたいと思います。つまり、この時代の特性は、炭鉱離職者の受け皿として成長産業があったということです。本当にそれによって可能になったということです。

その後というのは、むしろ、スクラップ・アンド・ビルド政策の中で「ビルド」として生き抜いた炭鉱は、その後、80年代、90年代に大手がつぶれていきますが、そのときには、大変皮肉なことに、もうその受け皿はないので、多くが地元にとどまらざるを得なかった。その例が夕張であった。だから、なぜ尺別のように夕張がならなかったかと言えば、もうそういう時代状況にはなかったということです。

そして、この当時、60年代、70年代の炭鉱閉山による離職者支援というのは非常に手厚い、失業保険、就